

日蓮大聖人御書全集

うぶゆそうじょうじ

産湯相承事

新版  
2229  
ゝ  
2231

うぶゆそうじようじ  
産湯相承事

にっこう しる

日興これを記す。

おんなの はじ ぜしよう じつみよう れんちよう もう たてまつ

御名乗りのこと。始めは是生、実名は蓮長と申し奉る。

のち にちれん おんなの おんこと ひも うめぎくによ わらわめ

後には日蓮と御名乗りある御事は、悲母・梅菊女へ童女の

おんな たいらはたけやまどの いちるい おわ うんぬん ほうごう

御名なり。平畠山殿の一類にて御座します云々、法号・

みようれんぜんに おんものがた おわ われ ふしぎ

妙蓮禅尼の御物語り御座しますことには、我に不思議の

ごむそう せいちようじ つやもう とき なんじ こころざし しん

御夢想あり。清澄寺に通夜申したりし時、「汝が志、真

しんみよう いちえんぶだいだいいち たから あた おも

に神妙なり。一閻浮提第一の宝を与えんと思うなり。

とうじよう かたうみ みくにのたゆう もの おとこ さだ

東条の片海に三国太夫という者あり。これを夫と定めよ」

うんぬん とし はるさんがつにじゆうよつか よ たし いま おぼ はべ  
云々。その歳の春三月二十四日の夜なり。正かに今も覚え侍  
るなり。

われ ふぼ おく たてまつ いご せんかた たわれめ  
我、父母に後れ奉って已後、詮方なく遊女のごとくな

とき おんみ ちち とつ よ れいむ い えいざん  
りし時、御身の父に嫁げり。ある夜の霊夢に曰わく、叡山の  
いただき こし おうみ こすい て あら ふじ

やま にちりん い いだ たてまつ おも う おどろ  
頂に腰をかけて、近江の湖水をもつて手を洗つて、富士の

のち がつすいとど ゆめものがたり もう はべ ちち たゆう われ  
山より日輪の出でたもうを懷き奉ると思つて打ち驚い

ふしぎ ごむそう こうむ こくうぞうぼさつ みめよ ちご  
て後、月水留まると夢物語を申し侍れば、父の太夫、「我も

不思議なる御夢を蒙るなり。虚空蔵菩薩、貌吉き児を  
おんかた たも しょうじん わ じようぎようぼだい

御肩に立て給う。『この少人は、我がためには上行菩提

さつた

ひもとひと

しょうざいまかさつた

薩埵なり。日の下の人のためには生財摩訶薩埵なり。また

いっさいうじよう

ゆすえさんぜじようごうだいどうし

一切有情のためには、行く末、三世常恒の大導師なり。こ

なんじあた

宣

みのちおことかいにんよしき

れを汝に与えん』とのたもうと見て後、御事懷妊の由を聞

かた

おことしょうにん

く」と語りあいたりき。さてこそ御事は聖人なれ。

う

よゆめ

ふじさんいただきのぼ

じつぼう

また產生まるべき夜の夢に、富士山の頂に登って十方

み

あき

たなごころうちみ

さんぜ

を見るに、明らかなること掌の内を見るがごとし。三世

めいはく

ぼんてんたいしやくしだいてんのうとうしよてん

らいげ

明白なり。梵天・帝釈・四大天王等の諸天、ことごとく来下

ほんじじじゆゆうほうしんによらいすいじやくじようぎようぼさつ

おんみ

して、「本地自受用報身如来の垂迹・上行菩薩の御身を

ぼんぷじ

けんげ

たも

ごたんじよう

ただいま

むねうち

しゆ

凡夫地に謙下し給う。御誕生は唯今なり。無熱池の主・

あなばだったりゆうおう　はちくどくすい　まさ　く　きた　まさ

阿那婆達多竜王、八功德水を応に汲み来るべきなり。当に

うぶゆ　ゆあみ　たてまつ　しよてん　つ

産湯に浴し奉るべし」と諸天に告げたまえり。よつて、

りゆうじんおう　そくじ　しやうれんげ　ひともとな　きた　はちす　しみず

竜神王、即時に青蓮華を一本荷い来れり。その蓮より清水

い　おんみ　ゆあみ　まい　はべ　あま　みず

を出だして、御身を浴し進らせ侍りけり。その余れる水を

してんげ　そそ　うるお　う　にんちく　そうもく　こくどせけん

ば四天下に灑ぐに、その潤いを受くる人畜・草木・国土世間、

こんじき　こうみよう　はな　しほう　そうもく　はなひら　みな

ことごとく金色の光明を放ち、四方の草木、花発き、菓成

る。

なんによぎ　なら　あ　ぼんのうな　おでい　なか　い

男女座を並べて有れども煩惱無く、淤泥の中より出ずれ

じんδει　そ　たと　れんげ　どろ　い　どろ　そ

ども塵泥に染まず。譬えば、蓮華の泥より出でて泥に染ま

ざるがごとし。人天・竜畜、共に白き蓮を各手に捧げ

ひむ

こんしさんがい

かいぜがう

ごちゆうしゆじよう

しつぜ

て、日に向かつて「今此三界

皆是我有

其中衆生

悉是

ごし ゆいがいちにん

のういくご

とな たてまつ

み おどろ

吾子 唯我一人 能為救護」と唱え奉ると見て驚けば、

すなわ しょうにんしゆつしょう

まいじさぜねん

いがりようしゆじよう

則ち聖人出生したまえり。「毎自作是念 以何令衆生

とくにゆうむじようどう

そくじようじゆぶつしん

くがな

たも

得入無上道 速成就仏身」と苦我滯き給う。

われすこ まどろ

とき

ぼんたいとう

しよてん

いちどうおん

とな

我少し寐みしようなりし時、梵帝等の諸天、一同音に唱

い

ぜんざい

ぜんざい

ぜんにちどうじ

まつぼうきようしゆしやかぶつ

えて言わく「善哉、善哉。善日童子、末法教主釈迦仏」と

さんどとな

さらいにこ

たも

うつつ

みき

三度唱えて作札而去し給うと寤に見聞きしなりと、たしか

かた

たま

き

それがし

にちれん

に語り給いしを聞こしめし、「さては、某は日蓮なり」と

宣

のたまひしなり。

しょうにんかさ

のたま

よう

にちれん

でしだんなとう

ひも

ものがたり

聖人重ねて曰う様は、日蓮が弟子檀那等、悲母の物語

おも

すなわ

きんげん

ゆえ

よ

しゅぎよう

か

と思うべからず。即ち金言なり。その故は、予が修行は兼

はは

れいむ

にちれん

ふじさんじねん

みようごう

ねて母の霊夢にありけり。日蓮は富士山自然の名号なり。

ふじ

ぐんみよう

じつみよう

だいにちれんげざん

い

われ

富士は郡名なり。実名をば大日蓮華山と云うなり。我、

ちゅうどう

しゅぎよう

ゆえ

くに

にほん

い

かみ

中道を修行する故に、かくのごとく国をば日本と云い、神

にちじん

もう

ほとけ

どうみよう

につしゆたいし

もう

よ

をば日神と申し、仏の童名をば日種太子と申し、予が

どうみよう

ぜんにち

けみよう

ぜしよう

じつみよう

すなわ

にちれん

童名をば善日、仮名は是生、実名は即ち日蓮なり。

くおんげしゅ

なんみようほうれんげきよう

しゅごしん

わ

くに

あまくだ

久遠下種の南無妙法蓮華經の守護神は、我が国に天下り

はじめし国は出雲なり。出雲に日の御崎という所あり。

はじ くに いずも

あまくだ

たも

ゆえ

ひ

みさき

もう

天照太神始めて天下り給う故に日の御崎と申すなり。

わ

しゃくそん

ほけきよう

と

あらわ

たま

このかた

じゅうらせつによ

我が釈尊、法華経を説き顕し給いしより已来、十羅刹女

ごう

じゅうらせつ

てんしやうだいじん

しゃくそん

にちれん

いつたい

と号す。十羅刹と天照太神と、釈尊と日蓮とは、一体の

いみよう

ほんじ

すいじやく

りやくこうだい

にちじん

がつじん

がつ

異名、本地・垂迹の利益広大なり。日神と月神とを合して

もんじ

くん

とお

じゅうらせつ

もう

しよじん

いつたい

つか

文字を訓ずれば十なり。十羅刹と申すは、諸神を一体に束ね

あ

じんぎ

にちれん

ひ

すなわ

にちじん

ひる

はちす

合わせたる深義なり。日蓮の日は即ち日神、昼なり。蓮は

すなわ

がつじん

よる

つき

みず

えん

はちす

みず

しやう

即ち月神、夜なり。月は水を縁とす。蓮は水より生ずる

ゆえ

ぜしやう

ひ

もと

ひと

う

か

故なり。また是生とは、日の下の人を生むと書けり。

にちれん てんじようてんげ いっさいしゅじよう しゅくん ふぼ ししよう

日蓮は天上天下の一切衆生の主君なり父母なり師匠な

いま くおんげしゅ じゅりようほん い こんしさんがい かいぜがう

り。今、久遠下種の寿量品に云わく「今此三界 皆是我有

しゅくん ぎ ごとちゅうしゅじよう しつぜがし ふぼ ぎ

〈主君の義なり〉。其中衆生 悉是吾子〈父母の義なり〉。

にこん ししよ たしよげんなん こくど そうもく ゆいがいちにん のういくご

而今此処 多諸患難〈国土・草木〉。唯我一人 能為救護

ししよう ぎ い さんぜじようごう にちれん こんしさんがい

〈師匠の義なり〉と云えり。三世常恒に日蓮は今此三界の

しゅ にちれん だいおん いけうじ れんみんきようけ りやくがとう

主なり。日蓮は「大恩 以希有事 憐愍教化 利益我等

むりようおつこう すいのうほうしや

無量億劫 誰能報者」なるべし。

にちれん げんざい でし みらい でしとう なか にち

もし日蓮が現在の弟子ならびに未来の弟子等の中に日

もじ なの うえ じ お じめん ほうばち こうむ

文字を名乗りの上の字に置かずんば、自然の法罰を蒙ると

知るべし。し 予が一期の功德は日文字に留め置くと御説法あよ いちご くどく にちもじ とど お ごせつぽう

りしまま、日興謹んでこれを記し奉る。にっこうつつし しる たてまつ

聖人言わく「この相承は日蓮嫡々一人の口決、唯授しょうにんのたま そうじよう にちれんちやくちやくいちにん くけつ ゆいじゆ

一人の秘伝なり。いちにん ひでん しんみよう しんみよう 神妙、神妙」とのたまいて留め畢わんとど お

ぬ。